

第一章…白銀の静寂、秘めやかな帯の音

窓の外は、音もなく降り積もる白銀の世界だった。

吐く息が白く染まるほどの冷氣も、老舗旅館「月見屋」の重厚な玄関をくぐれば、ふわりと温かい空気に包まれて溶けていく。

磨き上げられた廊下の床板、ほのかに香るい草と白檀の香り。

そして何より、隣を歩く彼女の存在が、僕の心臓を早鐘のように打ち鳴らしていた。

淡い青色の長い髪が、歩くたびにさらりと揺れる。

チノちゃん。

まだあどけなさを残す顔立ちと、年相応の可愛らしさを持つ少女。そのクールで静かな瞳の奥には、僕だけが知る情熱が秘められていることを、もう知っている。

「……すごく、静かですね」



ぼつりと、彼女が呟いた。鈴を転がしたような澄んだ声。
その視線は、少しだけ恥ずかしそうに斜め下を向いている。

「雪が音を吸い込んでいるのかもしれない。……あ、ウェルカムドリンクのコーヒー、いい香りがします」

彼女の鼻がひくつと小さく動いた。

仲居さんに案内され、離れの客室へと向かう。渡り廊下を進むにつれて、僕たちの距離は自然と近づいていく。

通された部屋は、縁側の向こうに専用の露天風呂へと続く庭があり、雪化粧をした石灯籠が風情を添えていた。

仲居さんが退出し、重厚な襖が閉められた瞬間——世界には、僕と彼女の二人きりになった。

「…………ふう」



彼女が小さく息を吐き、緊張を解くように畳の上へ座り込む。

その瞬間、厚手のコートの下から、隠しきれない膨らみが主張した。

華奢で小柄な体軀には不釣り合いなほどに豊かな、胸の大きさ。座ったことでコートの前が張り詰め、豊かな双丘のラインが布地越しに露わになる。

「……………どうかしましたか？ そんなにじつと見て」

青い瞳が、下から僕を射抜くように見上げてくる。

彼女は僕がどこを見ているのか、気づいているはずだ。

「いや、ようやく二人きりになれたなと思って」

「……………そうですね。遠くまで来た甲斐がありました」

彼女は立ち上がると、ゆっくりとコートのボタンに手をかけた。一つ、また一つとボタンが外れるたびに、僕の喉が渴いていく。



コートが脱ぎ捨てられ、その下のニットワンピース姿があらわになる。細い腰から急激な曲線を描いて隆起する胸元。その重みで生地が引つ張られ、谷間の形が浮き彫りになっている。

「温泉に入る前に、浴衣に着替えます」

「うん、そうだね。僕も着替えるよ」

僕たちは自然と同じ空間で着替え始めた。衣擦れの音だけが響く。

ニットを脱ぐために彼女が両手を上げると、その豊かな果実がたぶん、と重力に従って揺れるのが視界の端で捉えられた。

キャミソール一枚になった彼女の肌は、雪のように白く、そしてマシユマロのように柔らかそうだ。

「……視線、感じます」

振り返った彼女の顔は、ほんのりと朱に染まっていた。見られることで熱を帯びている

ような、潤んだ瞳。

「ごめん、つい。……綺麗だったから」

「……着替えるのが、遅くなってしまいました」

谷めるような口調とは裏腹に、彼女は着替えを急ごうとはしなかった。

ゆっくりと浴衣に袖を通す。

合わせを整える際、彼女の豊かな胸が邪魔をして、どうしても襟元がはだけてしまいうになる。

「……手伝ってもらえますか」

小さな声での要請。

僕は頷き、彼女の背後へと回った。ふわりと甘い香りが漂ってくる。

帯を締めるために正面に回ると、目の前には浴衣の合わせ目から覗く、圧倒的な谷間が

あった。

生地が悲鳴を上げるように張り詰め、その巨大な膨らみを包み込もうと必死に耐えている。

「……きつくない？」

「大丈夫です。……少し、苦しいくらいがいいので」

帯を結び終えると、彼女はふうと息を吐き、そのまま僕の胸元へと身体を預けてきた。

とん、と軽い衝撃。その直後、むにゅり、という柔らかくも重厚な感触が、僕の腹部から胸にかけて押し当てられる。

彼女は僕の浴衣の袖をぎゅっと掴み、顔を僕の胸に埋めた。

見上げれば、上目遣いの青い瞳が、とろりと潤んでいる。

「……温泉、行く前に」



彼女が呟く。

その言葉の先を待つ。

「……少しだけ、くっついていてもいいですか。寒かったので」

それが口実であることは、お互いに分かっている。

僕は彼女の背中に手を回し、そっと抱き寄せた。華奢な背中と、間に挟まれた豊かな果実の弾力。

「……心臓の音、早いです」

僕の胸に耳を当てていた彼女が、くすりと笑う気配がした。

「私も……同じくらい、早いです」

彼女が僕の手を取り、自身の胸元へと導く。浴衣の上からでも分かる、激しい鼓動。そ

して、掌が沈み込むほどの圧倒的なポリウム。
柔らかい。信じられないほどに柔らかく、そして熱い。

「……行きましょうか。お風呂」

少し掠れた声で彼女が促す。その瞳は、「お風呂」という言葉の響き以上の意味を含んでいた。

僕は彼女の手を握り直す。小さく握り返してくる力強さが、これからの濃密な時間を約束しているようだった。

浴衣の裾が擦れる音と共に、僕たちは湯気の立つガラス戸の方へと歩き出した。

第10章..白濁の湯に溶ける、誇らしき果实

ガラス戸を開けた瞬間、肌を刺すような冷氣と、それを上書きする濃厚な硫黄の香りが鼻腔を満たした。

岩で組まれた露天風呂には湯が湛えられ、白濁した水面からはもうもうと湯気が立ち上っ

ている。

けれど、僕の視界を支配していたのは、雪景色ではない。目の前で、躊躇いなく浴衣を脱ぎ捨てた彼女の姿だった。

「……寒いですから、早く入りましょう」

彼女が振り返る。湯気に霞むその肢体は、成熟した女性としての圧倒的な「凶器」を携えている。

重力に逆らうことなく、たわわに実った二つの果実。

彼女が歩き出すたび、それはぼよん、たぶん、と肉感的な音を立てて揺れ動き、その先端はきゅつと硬く尖っていた。

ちやぶん。

彼女が先に湯船へと足を滑り込ませる。白い湯が、彼女の柔肌を飲み込んでいく。

浮力によって持ち上げられた双丘が、水面から半分ほど顔を出し、白い島のように浮か

んでいる。

「……来てくれないんですか？」

濡れた青い瞳が、不安げに揺れる。誘うような、甘く、掠れた声。僕は憑かれたように浴衣を脱ぎ捨て、彼女の待つ湯船へと沈んだ。

熱い。隣に座った彼女から伝わってくる体温が、僕の理性を焦がすように熱い。

「……ふう……」

彼女の口から、艶めかしい吐息が漏れる。

湯船の中で、彼女がにじり寄ってきた。

水中にあるはずの太腿が、僕の太腿にびたりと密着する。そして、腕に押し当てられる、圧倒的な質量。



「……あの、見てください」

彼女が僕の手を取り、自分の胸へと導く。

濡れて輝くその肌は、吸い付くように僕の掌を受け入れた。指が沈み込む。どこまでも深く、柔らかく。

「……昔は、あんなに小さかったのに」

彼女が自分の胸を見下ろしながら、くすりと笑う。

その表情にあるのは、自信と、そして僕に向けられた優越感だ。

「コンプレックスだったんです。周りのみんなに比べて、私は子供みたいで……。でも、今は」

彼女は僕の手の上から自分の手を重ね、さらに強く押し付けた。むにゆう、と形を変える柔肉。



僕の指の隙間から、溢れんばかりの肉がはみ出してくる。

「今は、この胸が気に入っています。……だって」

彼女が顔を近づけてくる。長い睫毛が震え、熱っぽい吐息が僕の唇にかかる。

「……夢中になってくれるから」

ぞくり、と背筋に電流が走った。普段のクールな彼女からは想像もつかない、大胆で、淫らな言葉。

彼女は自分の変化を、成長を、ただ僕を悦ばせるための武器として磨き上げてきたのだ。

「……好きですよね？ 私の、これ」

問いかけながら、彼女は腰を浮かせるようにして、水面からその豊かな果実を露わにした。



湯気の中で露わになる、白く輝く巨大な曲線。滴る雫が、谷間を伝って流れ落ちていく。

「……………あ……………」

僕が思わずその先端を指先で弄ると、彼女の喉から甘い声が漏れた。身体がびくりと震え、湯面が波紋を描く。

「んっ……………ふう……………敏感に、なってるみたいですよ……………」

彼女の瞳がとろりと濁る。理性のタガが外れる音がした。

僕は彼女を抱き寄せ、その豊満な身体を強く抱きしめる。濡れた肌と肌が擦れ合う音。重なり合う心臓の鼓動。

「……………もっど……………」

彼女が僕の耳元で囁く。華奢な腕が僕の首に絡みつき、豊かな胸が僕の胸板を押し潰す

ように圧迫する。

「もっと、触ってください……。昔の私じゃできなかったこと、たくさん……してほしいんです」

それは、静かなる懇願であり、抗えない命令でもあった。

雪の降る静寂の夜。

湯けむりの中に隠された狭い空間で、僕たちは互いの熱だけを頼りに、さらに深く、濃密な情事へと堕ちていった。

「……あ、んっ……、その手、熱い……」

白濁した湯の中で、僕の手が彼女の秘められた場所へと伸びる。
彼女の吐息が、湯気よりも熱く、白く、夜空へと溶けていった。

第〇章…蜜の味、溢れる双丘の愛撫



白濁した湯が、ちゃぶん、と音を立てて波打つ。

けれど、その音さえも彼女の口から漏れる甘い音色にかき消されていた。

「んっ……ちゅ……あ、ふう……っ」

濡れた岩肌に背中を預けた彼女と、正面から抱き合うようにして唇を重ねる。

冷たい外気の中で、互いの口内だけが灼熱のように熱い。

彼女の舌が、懸命に僕の舌に絡みつき、唾液を交換し合う。

普段はクールな彼女が、今はとろんと瞼を落とし、無防備に僕を受け入れている。

「……はあ、ん……。息、できなくなりそうです……」

唇が離れると、銀の糸が引く。

彼女は肩で息をしながら、潤んだ瞳で僕を見つめた。頬は湯気と興奮で完熟した桃のよ

うに染まっている。

「……もつと、キスしてください。……子供扱い、しないで」

ねだるような上目遣い。

僕は彼女の言葉に応え、再び唇を塞ぐと同時に、僕の手は、彼女が「気に入っている」と誇るたわわな胸へと這い上がる。

ずしり。

掌に伝わるのは、信じがたいほどの重量感と、マシユマロが溶けたような極上の柔らかさ。

「っ……っ……あ……っ……!!」

僕が指に力を込め、その溢れんばかりの肉をむにゆりと揉みしだくと、彼女の背中がビクンと跳ねた。



口付けたままの唇から、押し殺したような嬌声が漏れ、僕の口内へと流れ込んでくる。

「んんっ……！　そこ、は……っ」

唇を離し、首筋へと顔を埋める。

僕は両手でその豊かな双丘を包み込み、内側へと寄せ集める。その谷間に顔を埋めると、圧倒的なミルクの香りと母性的な弾力に窒息しそうになった。

「……見てますか？　大きくなった胸……」

僕の頭を抱きしめながら、彼女が掠れた声で囁く。

白く滑らかな肌。青い血管が透けるほど薄い皮膚の下には、たっぷり詰まった脂肪と、愛おしい熱。

「……昔は、邪魔だと思っていました。……でも今は、こうして触ってもらえるのが……嬉しくて、仕方ありません」

彼女の手が僕の手に重なる。

そして、自分から胸を押し付けるようにして、僕の掌の中でその形を変形させた。

「……あ、んっ………！　だめ、そんなに強く……っ」

僕の指先が、硬く尖った桜色の突起を掠める。

その瞬間、彼女の身体が弓なりに反り、湯面が激しく波打った。

「……っ、ふあ………あ、あぁっ………！！」

敏感になっているそこを、親指の腹でコリコリと転がすように刺激する。

彼女のクールな仮面は完全に剥がれ落ちていた。

口元を手で覆い、快感を堪えようとするが、指の隙間からは艶めかしい吐息と声が漏れ出してしまう。



「……変に、なりそうです……。頭の芯が、痺れて……」

彼女は力なく僕の肩に額を預けた。

その姿があまりにも色っぽくて、僕の下腹部は疼きを増すばかりだ。

「……ここだけじゃ、足りません」

僕の胸板に、ぶにゆりと彼女の胸が押し当てられる。

彼女の瞳が、とろりと濁った情欲の色を帯びて僕を見上げていた。

「……お部屋に、戻りましょう？ ……続きは、お布団の中で……」

彼女の指先が、湯の中で僕の肌をなぞる。それは明確な誘いだった。

「……もう、我慢できません。……全部、委ねたいんです」



耳元で囁かれた甘い言葉に、理性が音を立てて崩壊する。

僕は頷き、彼女の濡れた身体を抱きかかえるようにして立ち上がった。

月明かりの下、露わになった彼女の全身は、湯気と雫を纏い、この世のものとは思えないほどの輝きを放っていた。

特に、呼吸をするたびに大きく揺れるその胸は、これからの濃密な夜を予感させるように、ぷるんと弾んだ。

第4章.. 絹の布団に沈む、渴望の果て

濡れたままの身体に乱れた浴衣を雑に羽織り、僕たちは雪の庭を後にした。

部屋は湯気一つないのに、まるで灼熱の部屋のように感じられた。

彼女はもう、言葉を重ねる余裕がない。

青い瞳は完全に潤み、甘い熱を帯びている。濡れた髪を振り乱しながら、一心不乱に僕の浴衣の襟を掴んで離さない。

「……早く。横に、なりませう……」

かすれた声で彼女がせがむ。その手つきは、普段の冷静沈着な彼女からは想像もつかないほど、激しく、そして切実だった。

厚く敷かれた布団の上に倒れ込む。

すぐに僕の浴衣は引き剥がされ、その熱を求めるように、彼女の華奢な体が覆い被さってきた。

「んんっ……!!」

彼女は濡れた自分の体を、僕の熱い体に強く押し付ける。

その瞬間、むにゆりと僕の胸板に押し潰された彼女の豊満な胸から、嬌声が漏れた。

「……気持ち、いいです。温かい……」



浴衣が完全に脱がされると、肌と肌が直接触れ合う。

湯上がりで火照った柔肌は、絹の布団の上で雪のように白く輝いていた。

僕はためらうことなく、その体をひっくり返し、再び彼女の圧倒的な胸元へと顔を埋めた。

「つ、あ………！　そこ………」

身体を捻り、快感を逃れようとする彼女。

僕は両手でその重く豊かな双丘を鷲掴みにし、熱狂的な眼差しで見つめた。

白く、美しく、そして僕の愛撫にひどく敏感な、彼女の誇らしき果実。

「……もう、触るだけじゃ、足りません」

僕は囁き、その先端へと顔を近づけた。

硬く尖った淡い桜色の突起。僕が唇でそれをそっと囲うと、彼女の身体が大きく震えた。

「つ、ああ……！？ ひつ……や、だめ、んんっ……！」

敬語を保とうとする理性と、快感に溺れる本能がせめぎ合い、その声はほとんど悲鳴に近いものになった。

僕は一切の遠慮を捨て、その先端を強く吸い上げた。

ちゅぶ、ちゅぶ、と水気を含んだ官能的な音が、静かな部屋に響き渡る。

「……つ、う、ああ……！ やさしく、してください……っ」

甘い吐息と共に、彼女の意識は遠のいていく。

片方を激しく吸い上げ、もう片方を指先で容赦なく弄る。

彼女の指が、僕の髪を握りしめ、布団を掻きむしった。

「……まるで、赤ちゃん、みたいですよ……っ。貪るように……」



彼女の言葉が、この行為に背徳的な意味を与えた。

僕は彼女の大きな胸を、まるで生命の源であるかのように食った。

激しい吸い上げに耐えきれず、彼女の背中が何度も弓なりに反る。

その反動で、豊満な胸が波打ち、湯上がりで火照った僕の顔に押し付けられる。

「んんっ……ふう、はあ……っ。あ、ああ……、そこまで、強く……」

涙が目の端に滲んでいる。

それは快感が限界を超えたことによる生理的な反応だった。

十分に愛撫された突起が、赤く腫れ上がり、びしょ濡れになって輝いている。

彼女はもう、自分の体を律することができなかった。

全身の力が抜け、僕の腕の中で蕩けていく。

「……全部、あげます。……この胸も、体も、心も……っ」



まるで自らを捧げるかのように、彼女は両手を広げ、僕の情事を受け入れた。その瞳に宿るのは、理性を超えた、ただ純粹な愛と、僕への絶対的な服従。

「……さあ、どうぞ。……もう、何も、隠しませんから……」

僕の体が、彼女の太腿の間へと滑り込む。

濡れた肌と、熱い吐息だけが、二人の間に残された。

第の章…溶け合う夜、満ち足りた二つの愛

湯の熱を纏った彼女の体が、絹の布団の上で僕の体を受け入れた。

青い髪は濡れて肌に張り付き、その肌は湯上がりど興奮でさらに白く、妖艶な光を放っている。

「……さあ、どうぞ」



僕が彼女の太腿の間へと身体を滑り込ませると、彼女は両腕を広げ、甘く、諦めたような声で囁いた。

僕は彼女の全身を熱烈なキスで覆い尽くした。唇、顎、首筋、鎖骨、そして再び、愛で腫れ上がったその豊かな胸へと。

濡れた舌で、敏感になった先端を優しく転がし、吸い上げる。

「んんっ……！ やっ、あ……！ そこ、もう、だめです……っ」

胸を愛撫されるたびに、彼女の腰が大きく跳ね、僕の腰に秘められた熱い部分が、彼女の熱い中心部へと押し付けられる。

僕は彼女の膝を割り、その熱に満ちた蜜壺の入り口へと、硬く熱された僕の全てをそっ
と押し当てた。



「……っ！」

「……大丈夫？」

初めての挿入は、一瞬の戸惑いを伴った。

身体を硬くする彼女に、僕が優しく尋ねる。

「……はい、大丈夫です。……全部、受け止めますから」

青い瞳が、決意を秘めたように僕を見つめ返す。

その言葉に背中を押され、僕はゆっくりと、だが確実に、彼女の内側へと深く沈み込んでいった。

「っ、ああ……！！ んんっ……！！」

熱い。どこまでも熱く、そして、ぎゅう、と締め付けてくるような、吸い付くような感觸。



「……チノちゃん、すごい、気持ちいい……」

彼女は僕の肩を掻きむしりながら、甘い吐息を漏らす。

「……んっ、ああ……！ 深く、来てます……っ。奥の、方まで……っ」

僕の腰が、彼女の願いに応えるように激しく動き始める。

布団が軋み、二つの体がぶつかり合う音と、水気を含んだ官能的な音が、夜の静寂を破る。

「っ、はあ、ん……！ 早いです、早すぎます……っ。でも、止まらないで……っ」
「……やめられないよ、チノちゃんが、あまりにも……っ」

彼女の華奢な体からは想像もできないほどの激しい快感が、僕を襲う。

その体は、僕の動きに合わせて激しく揺れ、豊満な胸がたぶんたぶんと波打つ。



「……あ、んんっ……！ あ、ああ……っ、そこ……！ い、いっちゃいます……っ」

彼女の体がビクンと大きく震え、硬直する。

僕を締め付けていた彼女の内側が、さらに強く、激しく収縮した。

「っ……ああっ！」

彼女が、僕より先に最初の絶頂を迎えた。

絶叫に近い嬌声上がり、彼女の体に宿っていた最後の理性が、音を立てて崩壊する。

「……きもちい、です……っ。こんなの、初めて……っ。ぜんぶ、せいです……っ」

完全に快感に溺れた彼女は、僕の首に抱きつき、涙声で甘い言葉を訴えかける。

僕は彼女を強く抱きしめ、二度、三度と愛の営みを繰り返した。

その都度、彼女は激しく喘ぎ、僕の腰の動きを求めた。



「んっ、ふぁ……っ！　だめ、もう、いっばいに……っ。あ、ああ……っ！」

数度の絶頂を経て、彼女の瞳は完全に僕への愛で満たされていた。そして、ついに僕の理性の糸が切れる。

「……チノちゃん、僕、もう……っ」

僕は彼女の熱い内側で、全てを解放した。ドク、ドク、と脈打つように溢れ出す熱い愛。彼女はそれを全て受け止め、僕の腰を抱きしめた。

「ああ……っ、んんっ……っ！　あつ、いです……っ！　たくさん、来てます……っ」

僕の全てが彼女の中に流れ込み、二人の愛が混ざり合う。

彼女は最後の力を振り絞るように、僕の背中を強く掻き、そして同時に、二度目の激しい絶頂に達した。



息が整うと、彼女は僕の胸に顔を埋め、濡れた声で囁いた。

「……すぐく、気持ちよかったです。ありがとうございます」

僕は彼女の汗を拭い、満たされた表情にキスを降らせる。

「僕もだよ。こんなに気持ちいいのは、チノちゃんだけだ。……幸せだ」

僕たちは抱き合ったまま、何度も、何度も、口付けを交わした。
優しく、愛おしく、そして深く。

彼女の胸に顔を埋めると、まだ激しく鼓動を打つ心臓の音と、溢れんばかりの柔らかな
弾力が伝わってくる。

「……今夜は、このまま、離れないてくださいね」



僕の髪を優しく撫でながら、彼女が甘く、静かに囁いた。
僕たちは、二度と離れることのない愛を誓い合った。

満ち足りた吐息と共に、雪の夜は、深く更けていく。

エピローグ…夜明けの静寂、愛の余韻

障子の隙間から差し込む、淡い朝の光。

雪景色を映したその光は、昨夜の情事の痕跡を、絹の布団の上に優しく浮かび上がらせていた。

僕の腕の中で、彼女は静かに眠っていた。

普段のクールな表情とはかけ離れた、安らかで、わずかに蕩けたような寝顔。淡い青色の髪が、露わになった豊かな胸の上に散らばっている。



ふと、彼女が身じろぎした。

その小さな動きに、昨夜の終わりに僕が注ぎ込んだ愛の跡が、彼女の内側からじわりと溢れ出すのが感じられる。

その事実が、僕の胸を静かな興奮で満たした。

「ん……」

小さな、寝起きの声。

彼女がゆっくりと瞼を開ける。青い瞳が僕を捉え、すぐに昨夜の情景を思い出して、その頬が朝焼けのように赤く染まった。

「……おはようございます」

「おはよう、チノちゃん」

僕が優しくキスをすると、彼女はすぐにそれを受け入れた。

寝起きのキスは、甘く、深い。昨夜の蜜の味がまだ微かに残り、彼女の舌が積極的に僕

の舌を迎え入れる。

「ふあ……ちゅ……んんっ……」

一晩中、激しい愛を受け入れたはずなのに、彼女の体はもう、僕の接触到ひどく敏感になつていた。

僕がその柔らかな胸に手を伸ばすと、彼女の体はすぐにビクンと反応する。

「っ、あ………！ もう………っ、朝から、だめです………っ」

そう言いながらも、彼女は僕の手を拒まない。むしろ、僕の体にさらに密着し、自らその豊かな胸を僕の掌へと押し付けてくる。

その胸は、昨日よりもさらに張りを増しているように見えた。

「………気持ちよかつたって、覚えてる？」



僕が甘く尋ねると、彼女は顔を隠すように僕の胸に埋めた。

「……忘れるわけ、ないでしょう。……ずっと、奥が……じんじん、してます」

甘い吐息と共に、その声は熱を帯びていた。

僕は彼女の胸を揉みしだきながら、そっとその耳元で囁く。

「昨夜、チノちゃんの奥で、何度もイツちゃった。……愛が溢れちゃったよ」

彼女の全身が、一瞬で熱に包まれた。

「っ、ああ……っ！ そんなこと……っ、言わないでください……！ ふ、ふやけちゃいます……っ」

その言葉は、僕の行為が彼女にとってどれほど幸福なものだったかを物語っていた。興奮で呼吸が乱れ、その体は震えている。



「んっ……ふう……やさしく、してください……っ。胸が、くすぐりたい……っ」

僕は舌で、耳たぶから首筋へ、そして谷間へと愛の軌跡を描く。

たわわな果実の先端は、再び硬く、真っ赤に熟していた。

昨夜よりも時間をかけ、ゆっくりと、その肉塊を慈しむように愛撫する。

「あ……っ、んんっ……、あ……っ」

喘ぎ声が、甘いメロデーのように部屋に響く。

その声を聞くたびに、僕の理性はさらに遠のき、愛おしさが募る。

「……ねえ、もう一度」

僕の問いかけに、彼女は言葉で答える代わりに、僕の体を強く抱きしめ、熱いキスを仕掛けてきた。



そのキスは、朝の光よりも眩しく、雪解け水よりも清らかで、そして昨夜よりも激しかった。

布団が再び軋み始める。

僕たちは、朝の光の中で、再び愛を確かめ合った。

昨日よりも強く、深く、互いを求め合う愛の営み。

「……………つ、ふああ……………！ 千ノちゃん、最高だよ……………っ」

「……………んっ、あ、ああ……………！ 大好きです……………っ！ 一緒にいると……………っ」

絶頂の瞬間、彼女が僕の名前を呼びそうになるのを、僕の唇が塞いだ。

名前を呼ばなくても、二人称を使わなくても、僕たちの間には、言葉以上の確かな愛が満ちていた。

激しい愛の後の静寂の中、僕たちは抱き合ったまま、雪の庭を見つめた。
冷たい雪景色と、対照的な僕たちの灼熱。



「……また、来ましようね。今度は、もつと長く……」

彼女は僕の胸に顔を埋めたまま、静かに、そして確信に満ちた声で囁いた。僕たちは、この愛の熱が永遠に続くことを知っていた。

この雪の夜は、二人の愛の物語の、始まりに過ぎないのだ。

く完く

